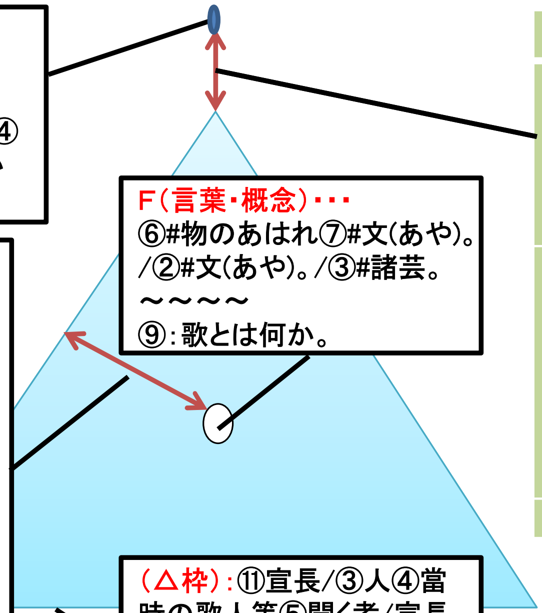
小林秀雄著『本居宣長』: 三十六章主題《歌といふ物（物：場 C‘）のおこる（D1）所(心。物：場 C‘)に歌の本義を求めた「宣長・契沖」と、當時の歌人達・諸芸との懸隔》その「關係論」的纏め。

①歌といふ物②所③言語④歌⑤#歌學⇒からの關係:①のおこる②とは,即ち③の出で來る②であり,④は③の粋[えりぬき。④は③の働きの本然（元々の姿）]と考へた事が,⑧の⑤の最大の特色⇒⑥#物のあはれ⑦#文(あや)⇒[⑥にたへぬところよりほころび出て,をのづから⑦ある辭]と④を定義⇒⑪宣長
①#歌⇒からの關係:①は,③に聞かする所(事の世界),もつとも①の本義⇒②#文(あや)⇒②は,⑤を悦ばす爲の工夫(言の世界)とは,④には餘計な事.②の意味合の相違がある.④の②とは,思ふ事をはつきり認識するのが先決[思ふ事の理附けが先決]⇒③人④當時の歌人等⑤聞く者
①#歌②#心⇒からの關係:①は,わが②よりいづる事であり,[②⇒いづる]が⇒③#諸芸⇒①が③のたぐひ[#技芸 の #家筋.技藝⇒#御伝授]とはいへない決定的な理由だ。そして[②⇒いづる]が又,[#歌道 ばかりは身一つ(#無私#直知 #心眼)にある事なり],といふ言葉で言はれる⇒宣長

①歌といふ物（物：場 C‘）②所〔即ち心。（物：場 C‘）〕③歌（物：場 C‘）④契沖の歌學（物：場 C‘）⑤歌學（物：場 C‘）⑥詠歌（物：場 C‘）⑦在りか（出所。物：場 C‘）⑧古人の心（物：場 C‘）⇒からの關係：⑩は、①のおこる（D1の至大化）②に③の本義（本來の意義：D1の至大化）を求めた。それはまさしく、④を嗣ぐものであつた。つまり、⑪は⑤に於ける難問〔とは：⑫にも明言出來ない（D1の至小化）、⑤のどんな教へ（D1の至大化）が、どんな風（D1の至大化）に⑥の役に立つ（D1の至大化）かと言ふ事〕の「◎：⑦〔即ち：⑧に直かに推參する道（大明眼：D1の至大化）〕を、はつきり見定めてゐた（D1の至大化）」⇒「⑨：歌とは何か」（◎的概念F）⇒E：上記兩人とは逆に、⑬は、極めて素朴な質問（Eの至大化）と言へる⑨が、『①のおこる（D1の至大化）②』まで行き着く（Eの至大化）ものとは、夢にも思へない（Eの至小化）でゐた」（⑨への距離不獲得：Eの至小化）⇒⑬當時の歌人達⑫誰⑩宣長⑪契沖（△枠）：①への適應正常。

（物：場 C‘）・・・
①歌といふ物②所③言語④歌⑤#歌學。/①#歌。/①#歌②#心。
～～～～～～～～～～～～～～～
①歌といふ物（物：場 C‘）②所〔即ち心。（物：場 C‘）〕③歌（物：場 C‘）④契沖の歌學（物：場 C‘）⑤歌學（物：場 C‘）⑥詠歌（物：場 C‘）⑦在りか（出所。物：場 C‘）⑧古人の心（物：場 C‘



F（言葉・概念）・・・
⑥#物のあはれ⑦#文(あや)。/②#文(あや)。/③#諸芸。
～～～～
⑨：歌とは何か。

からの關係（D1の至大化）

＊「:①のおこる②とは,即ち③の出で來る②であり,④は③の粋[えりぬき。④は③の働きの本然（元々の姿）]と考へた事が,⑧の⑤の最大の特色」。
＊「①は,③に聞かする所(事の世界),もつとも①の本義」。
＊「:①は,わが②よりいづる事であり,[②⇒いづる]が」。

＊「⑩は、①のおこる（D1の至大化）②に③の本義（本來の意義：D1の至大化）を求めた。それはまさしく、④を嗣ぐものであつた。つまり、⑪は⑤に於ける難問〔とは：⑫にも明言出來ない（D1の至小化）、⑤のどんな教へ（D1の至大化）が、どんな風（D1の至大化）に⑥の役に立つ（D1の至大化）かと言ふ事〕の「◎：⑦〔即ち：⑧に直かに推參する道（大明眼：D1の至大化）〕を、はつきり見定めてゐた（D1の至大化）」。

E：〔F（言葉・概念）との附き合ひ方・用法〕・・・「So called」「Fと（△枠）との距離獲得」（Eの至大化）。
＊[⑥にたへぬところよりほころび出て,をのづから⑦ある辭]と④を定義」。
＊「②は,⑤を悦ばす爲の工夫(言の世界)とは,④には餘計な事.②の意味合の相違がある.④の②とは,思ふ事をはつきり認識するのが先決[思ふ事の理附けが先決]。
＊「①が③のたぐひ[#技芸 の #家筋.技藝⇒#御伝授]とはいへない決定的な理由だ。そして[②⇒いづる]が又,[#歌道 ばかりは身一つ(#直知 #心眼)にある事なり],といふ言葉で言はれる」。
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
＊「上記兩人とは逆に、⑬は、極めて素朴な質問（Eの至大化）と言へる⑨が、『①のおこる（D1の至大化）②』まで行き着く（Eの至大化）ものとは、夢にも思へない（Eの至小化）でゐた」。

（△枠）：⑪宣長/③人④當時の歌人等⑤聞く者/宣長
～～～～～
⑬當時の歌人達⑫誰⑩宣長⑪契沖